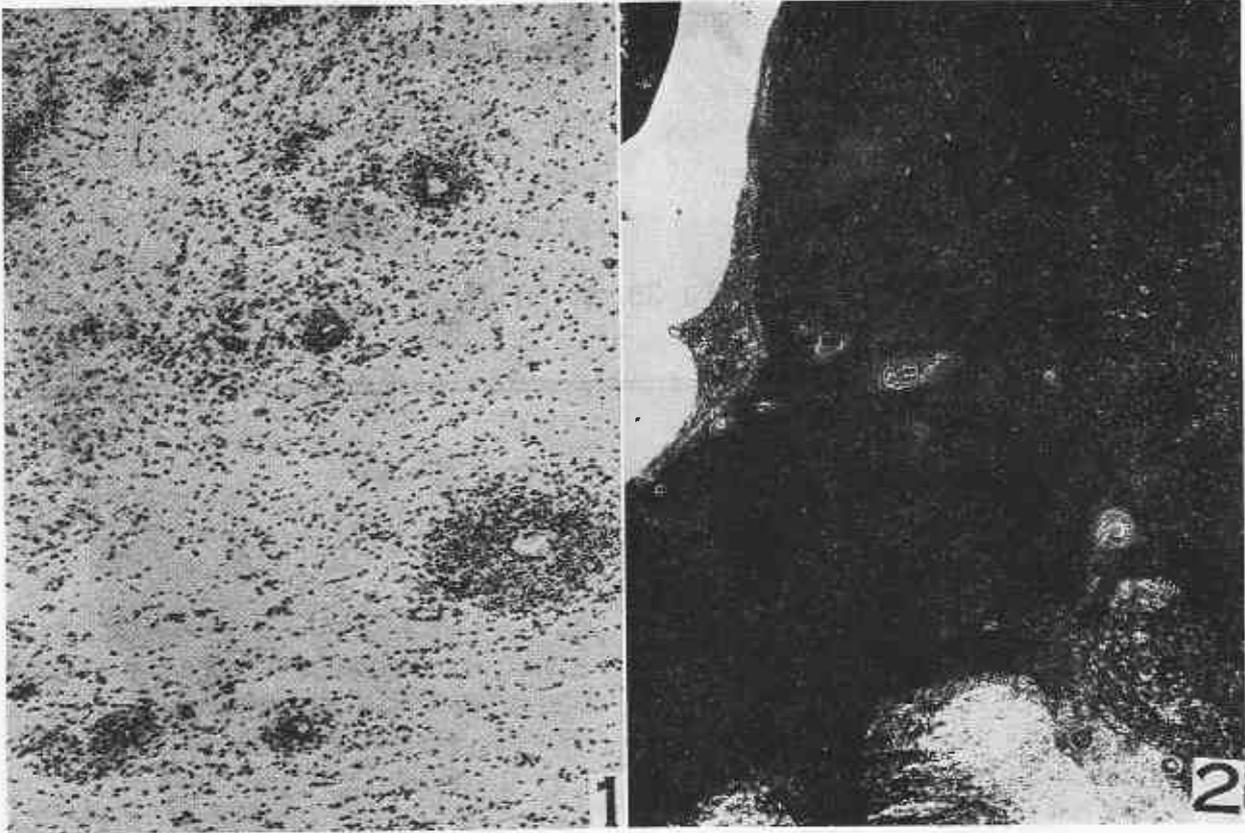


いわゆる実験的アレルギー性脳炎

日本生物科学研究所出題・第4回獣医病理学研修会標本 No. 49



モルモット，ハートレイ種の右耳根部皮内に Freund の adjuvant 加ウサギ脊髄乳剤 0.1ml を注射した。注射後 11 日目に左前肢の軽い麻痺，13 日目には右側前後肢の不完全麻痺，左側前後肢の完全麻痺および右上方への軽度の斜頸，起立不能，尿失禁が観察された。当日放血殺。

肉眼的に脳軟膜の軽度の充血，脾の腫大，注射部位における示指頭大の硬結 2 コ，その皮膚面に小指頭面大の痂皮形成を認めた。

組織学的には脳の各域において出血，うつ血，血管内皮細胞の腫大，淡明化，血管外膜の疎性化，外膜細胞の増生，好中球・リンパ球の浸潤，血漿の浸淫がみられた。ウイルヒョウ・ロバン氏腔は拡張し漿液が貯留し，単核細胞を混ざるものがあり，一部では顕著な血管周囲性細胞浸潤を呈した。主として炎性中小静脈の周囲基質では浮腫，好中球および組織球性細胞の浸潤，膠細胞の

繁殖があり大小の空隙を形成した。膠細胞はしばしば核の腫大，淡明化を呈するが，他方軽度の濃縮・崩壊に陥るものもあつた。図 1 (ガロシアン染色，×60) は小脳核領域に拡がる病変を示す。

このような病巣では，しばしば血管周囲性に限界鮮明な脱髄が証明された (図 2，シュピールマイエル髄鞘染色，×32)。炎性血管の近位では殆んど完全な脱髄を示すが，その外側では髄鞘は膨化，空胞化等軽度の傷害を受けるに止まつた。髄鞘傷害部域の軸索の一部には疎開，膨化あるいは断裂をみたが，大部分はなお健常にみえた。病巣内に位置する神経細胞の一部は急性腫脹，あるいは重篤性細胞変化に陥つた。

実質性病変と密接な関係のもとに髄膜の炎症もみられた。

すなわち組織学的には播種性脱髄性脳脊髄・髄膜炎と診断されるものである。